

別室登校における取組について

不登校児童・生徒の状況

対象児童は現在小学校 5 年生で、1 年生の 3 学期から登校渋りが始まり、4 年生の 5 月から不登校状態が継続している。本児童の発達の特長や不登校の要因について校内委員会で検討を行い、4 年生から特別支援教室へ通うようになり、週 2 回、個別の指導を受けている。社会的スキルの取得を目指して、指導を継続している。

具体的な取組

特別支援教室教員やコーディネーター、校内別室指導員が連携することにより、対象児童の発達の特長や支援方針、対応の方法などの共通認識をもって本児童を支援することができている。特別支援教室での指導を通して社会的スキルの取得を目指し、校内別室や所属学級で活用できるよう取り組んでいる。

当該児童は、他の児童からの視線が気になり、他の児童がいるときは隠れる姿が見られていた。教室のレイアウトを工夫することにより、個別の場所と小集団で活動できる場所を設定した。同じ空間にすることで、他の児童や指導員と将棋やカードゲームを行うようになり、人と関わる楽しさを味わい、人への安心感を回復させている。



所属学級の児童との給食交流を行っている。担任教員が所属学級から数名の児童を募り、校内別室で一緒に給食を食べ過ごしている。所属学級の児童との関わりの場を設け、給食後の休憩時間中も一緒にカードゲーム等をして過ごすことにより、所属学級への心の壁が以前に比べると低くなってきている。

当該児童は、学習の遅れを気にすることもあり、本人の希望により、算数の授業では ICT を活用して、オンラインで行った。担任教員と連携することにより、別室から所属学級で行われている授業を体験することができ、勉強への意欲の向上につなげている。

成果

毎日学校へ登校できる環境が整い、当該児童の状況によっては、給食まで学校で過ごすことができるようになった。登校できたという達成感を感じ、自己肯定感が高まり、人との関わりを通して、信頼関係の構築につなげることができている。

課題

登下校において、保護者の送迎協力が得られない場合には、学校として登下校支援ができない難しさがある。

不登校傾向の生徒への支援について

不登校児童・生徒の状況

学校全体で不登校傾向の生徒は 10 名程度在籍している。また、その他にも登校することはできているが、教室に入るのが難しい生徒も数名在籍している。

具体的な取組

【校内支援会議の企画・運営】

- ・校内支援委員会の立ち上げ
- ・校内支援委員会による生徒情報の共有、全体周知
- ・学校全体での支援の一本化（校内支援委員会で決定した支援策を学年に伝える。）
- ・週 1 回の支援会議の実施

【SC や関係機関等との連携】

- ・SC と生徒との間でのカウンセリングの実施
- ・カウンセリング内容の情報共有
- ・SC の校内支援会議への参加
- ・SC からの助言等の学校周知

【不登校生徒の居場所づくり】

- ・別室登校が可能な居場所の確保
- ・対象生徒と相談しての登校時間の事前設定（生徒が登校しやすく、見通しがもてるようにする。）
- ・別室対応教員及び別室登校支援員の調整と配置

【生徒が安心できる空間の確保】

- ・クッションフロア、ベッドスペース
- ・個別ブースの設置



成果

2 か月の間に 4 名の生徒が校内別室を利用し、自分のペースで心を落ち着かせることができた。その結果、教室に戻ることができたり、行事に参加することができたりなどの学校生活への意欲の高まりを見ることができた。

課題

教員間の校内別室に対しての共通理解を深めるとともに、利用方法、運営方法などの仕組みの確立が課題である。

別室登校支援の取組について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、集団との不適応を主訴として別室登校を利用している。その理由としては、学習の遅れや交友関係がうまく築けないことなど多岐にわたる。現在5名の生徒が、断続的に活用しているが、活用が必要と思われる生徒はその数を上回る。

具体的な取組

校内体制の強化①

不登校の理由が多岐にわたることと同様に、別室登校における生徒のニーズも多様である。「COCOLOプラン」のコンセプトを達成させるためにも、別室登校支援員については、教職経験者や大学院生など多様な人材を登用することを心掛けている。

校内体制の強化②

別室登校支援員のスケジュール管理については、不登校対策担当が中心となり行っている。また、別室登校支援員の在室の有無が分かるように、職員室や図書室などに表を掲げることで、緊急の対応においても迅速に行えるような工夫をしている。

	日	月	火	水	木	金
A	●	●	●	○	○	○
B	○	○	●	●	○	○
C	○	○	○	●	●	○

※ 職員室の日に限って、別室登校支援員がいます。

組織力の向上

校内支援委員会（週1回）では、利用生徒の状況報告を共有することで、担任を含む全教職員が共通理解を図ることができている。また、同委員会において支援員からの情報を報告してもらうことで、支援員との情報交換を密に連携できるような仕組み作りができている。

個々の不登校生徒への支援

別室における過ごし方については、自学自習を基本とし、支援員はそのサポートをするという形で生徒と接している。学習手段としてはGIGA端末を用い、各クラスから配信される授業を視聴する方法や「eライブラリ」の活用した学習が挙げられる。

成果

「別室登校」という選択肢が増えたことで、集団に馴染みにくい生徒が学校に足を運ぶ機会が増えたことを実感している。登校をすることで支援員や生徒同士と接し、社会性を身に付けるという点では、一定の成果を上げられていると感じている。

課題

別室登校支援事業が2年間の期間限定であるため、本事業終了後（令和7年以降）の取組について、検討する必要がある。